

赤木由子

黒い瞳の ウルフたち



白石書店

あかぎ・よしこ

1927年、山形県鶴岡市に生まれる。

中国・鞍山常磐高女卒後、新聞・雑誌記者となる。

『柳のわたとぶ国』（理論社）によって童話作家として

出発。主な作品に『二つの国の物語』（理論社）

『はだかの天使』（新日本出版社）『花と海の星座』

（童心社）『ひまわり愛の花』（金の星社）など。

日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会会員。

黒い瞳のウルフたち

発行 一九八四年八月二十五日

著者 赤木由子 ©一九八四年

発行者 白石舜市郎

発行所 株式会社 白石書店

東京都千代田区神田神保町一―二八

郵便番号一〇一

電話東京（二九一）七六〇一（代）

印刷所 文栄印刷株式会社

製本所 有限会社坂本製本所

乱丁・落丁本はおとりかえします。

赤木由子

黒い瞳のウルフ

白石書店

目次

敗北の青春 7

炭鉱の少女 66

それぞれの別れ 135

焼かれるこどもたち 197

黒い瞳の
ウルフ
たち

『新婦人しんぶん』一九八二年六月三日～一九八三年八月二十五日まで連載

敗北の青春

こどもたちがベッドに入ったあとも、ひとりでウイスキーの角瓶をかたむけながら、テレビの野球放送を見ていた信行が、

「おい、寝るぞ」

と、亮子に声をかけて立ちあがった。

「んー。もう、ちょっと」

夫に背を向けて、折りたたみ式の文机の原稿用紙にペンを走らせていた亮子は、煮えきらない返事をした。

「いいかげんにしろ。一円のものでもないものをなんだい」

「ええ？」

顔をあげた亮子の眼のまえで、がっしりとした信行のからだをのみこんだ寝室のふすまが、音

をたててしまった。

そのふすまをにらみつけて、亮子は、ぎりっと、くちびるをかんだ。

一円の金にもならないものを、といった信行のことばが、亮子の胸をえぐった。無口な信行も、そのひとことに、この一、二年の亮子の行動へのあてこすりをこめたのだ。

（それじゃ、お金になることなら、やってもいいというわけなの？）

そうではない。信行は妻がパートで働きにでるのさえ、気にいらぬひとなのだ。

これまでの亮子は、夫が会社から帰宅したあとは、本を読んだり、原稿用紙をひろげたりしないように気をつかっていたのだが、この数日は、ついつい、信行に背を向けて書きついできた。

そんなにまでして、亮子が仕上げをいそいでいるのは、亮子も受講生になっている、公民館の婦人講座で、「自分史」を作成することになり、その最終メ切が迫っているからだった。

亮子は、公民館でひらいている講座を、女性史のほかに、日本の歴史、日本の文学、こどもの教育と文化と、四つも受講している。信行が出勤したあとは、連日のように公民館へでかけていくのが、亮子の日課になってしまった。ほかに、哲学の自主サークルにも入っている。信行にかくれて、小説らしいものも書きためてきた。

考えてみるまでもなく、亮子が、きゆうに火がついたように、公民館へ足を向けはじめたころから、信行の機嫌がわるくなってきた。

いまも、ふすまごしに、咳ばらいで、さいそくをしてよこした。

信行は、気にいらなことがあっても、亮子に手をあげたり、どなったりはしないが、それでも、亮子はむかついてくる。夫の咳ばらい一つで、あいての意のままになるしかない妻というのが、おぞましくなる。

それならそのように、ばりばりと、口論をすれば、さぞ、すっきりするだろうと思うものの、亮子もまた、どちらかというと、内向的な性格だった。

（このへんで、妥協したほうがいいのか）

腰をうかしかけた亮子は、ふと、だれかにみつめられているような気がして、茶の間を見まわした。

だれも見ている者はいない。ペンを持ちなおしたとき、横の本棚においてある目覚まし時計の、黒い文字盤に自分の顔が映っていた。

あごが小さく、大きな黒ぐろとした双つの眼が、じっと自分を見つめている。亮子は、四、五歳のころから、近所のおばさんに、「とくべつ眼の黒い子だこと」と、いわれてきた。小学校にあがると、女の子たちは、「あんたの眼、黒いゴバン石みてえだ」と、いつていた。

亮子は、からだつきは、小柄ではっそりしているのに、かぜ一つひいたことがなく、すこぶる丈夫にできている。

それは、昭和十八年に東京の築地で生まれた亮子が、二歳のときから高校を卒業するまでのあいだ、秋田県の尾去沢にある銅山の町で過ごしたせいではないかと思う。

寢室から、二度めの咳ばらいがきこえた。

（いいかげんにしてよ）

と、あさましく、どなりつけたい衝動をおさえて、亮子は、明るくこたえる。

「いま、いくわ。ゆり子たちを、トイレに起こしてからね」

声とはうらはらに、亮子の黒い瞳は、めらめらと燃えた。あいてが、たとえ夫であろうと、意にそぐわない者は、キバをむいて拒絶する一匹の狼に変身する自分を覚えた。

「どっこいしょ」

亮子は、わざと声にだして立つと、夫婦の部屋のと成りの、小部屋へ入っていった。

二段ベッドの上の段に、小学四年の明子、下の段は、小学二年の洋子、かたわらのベビーベッドには、二歳のゆり子が、子犬みたいに、ころんとまるまって眠っている。

洋子を起こし、ゆり子は抱いて、トイレへつれていき、ふたりをベッドにもどすと、あとは、どうしても夫のそばへいくしかない。

思いきりわるく、茶の間の電気を消した。闇が押しよせてきた。

（大奥の女でもあるまいし……）

ようやく、信行のかたわらに、ほっそりとしたからだをすべりこませる。信行の、指がみじかく肉の厚い手が亮子の肩をわしづかみにする。

抵抗する理由はない。しかし、納得のいかないとなみである。信行の一方的な、荒々しい要

求が満たされ、やがて、信行は、かるくいびきをかいて眠りについた。

亮子は、いつまでも、暗がりでも、眼をあけていた。どれくらいの時間がたったかわからない。

カーテンを引きわすれた黒い窓ガラスが明るくなった。月がのぼったのだ。

（あのときの妥協が、いまだに尾をひいているのだ。このままでは、わたしたち夫婦は、だめになるかもしれない）

一つの家庭が崩壊する際は、どれだけの苦痛に見舞われることか。しかし、崩壊するか、しないかは、亮子のこれからの生き方にかかっているといえる。

不安といらだちが、もやもやと、胸の底でからみあう。

あのときの妥協というのは、わかい日の亮子が、自分からさそった信行との一年ちかい同棲のすえに、信行が正式に結婚しようといったのを、断りきれなかった亮子自信の弱さをさしている。

このひとつとは、根本のところでは相容れ（あひあ）ないのではないかという不安があったのに、なぜ、区役所へ結婚届をだしにいったのか。信行からも、まわりからも、男を手玉に取る、ふしだらな女と、思われるのを恐れたからだだった。

いまくらいの知恵や判断力があつたなら、世間の眼より、自分の心の底の声に耳をかたむけたであろうにと、悔やんでも悔やみきれない思いを、かみしめる。

亮子は眠れないままに、自分の生いたちを点検するかのようにな、過去をたぐりよせていった。

亮子が生まれた東京の築地の家は、魚河岸にちかく、亮子の祖父は河岸の仲買人として羽ぶり

がよかった。

昭和十九年秋、亮子の父は、それまで勤めていた日本橋の呉服店も休業になり、徴用で兵器工場へいき、一日じゅう鉄板をハンマーで叩く板金の仕事をやらされた。それがもとで、父は難聴になった。

昭和二十年、三月十日の東京空襲で亮子の家も被災する。六月、父にも赤紙がきて、青森県野辺地の部隊へ、持っていかれた。すでに兵隊の数が不足していたのか、難聴にもかかわらず通信兵になった。

母は、亮子の次の子を身ごもったからだで、秋田県の尾去沢町おきりざわ鹿角かづのの、夫の生家に身を寄せる。混雑する汽車に、二歳の亮子をおぶったまま、十数時間もゆられて辿りつくのだが、身ごもっていた子は流産をして二度とこどもを生めなくなる。母は、それ以前にも防空演習がこたえて、流産していた。

母は戦後、何年たっても、「戦争なんて、まっぴらだね。げた一つ満足になくてさ」と、吐きすてるようにいつていた。当時、ようやく手に入るげたは、フシだらけで重たかったという。ころんだひょうしに、そのフシがぼろっと抜けて、げたに穴があいたという。

母はまた、夫の帰ってこない、鹿角での暮らしを「さみしくて、さみしくて、どうにもこうにも、がまんできなかったねえ」と、いまだに、思いだしてつぶやくことがある。

東京の下町でも、活気のある魚河岸に出入りして育った母には、周囲をはげ山や、鼻をつく煙

を吐きだす、高い煙突にかこまれた鹿角の町は、やぼったく、荒々しい山里に思えたのだろう。

それほどきらった銅山の町で、母は、兵隊からもどった夫と亮子と、親子三人の暮らしを、十五、六年も、送ることになる。

兵隊からもどった父は、銅山の職員になり、購買部の衣料品係の仕事につく。実直な人柄なので、だれからも信頼されていたらしい。

亮子の一家に与えられた社宅のまんまにレンガ造り、三階建てのりっぱな映画館があった。月に二十回ほど、銅山の組合の文化部が、劇映画やニュースを安い料金で上映していた。

「二十四の瞳」「風の中の子ども」「砂漠は生きている」「おらあ、三太だ」「ノンちゃん雲にのる」「禁じられた遊び」といった映画の題名が、いまでも、亮子の口から、すらすら、でてくる。デイズニーまんがの、「白雪姫」や「シンデレラ姫」、そのほか、戦争映画もあった。

亮子が、戦後の日本に起きた、下山事件、三鷹事件、松川事件の、一連の謀略事件を知っているのも、映画館にいりびたって、ニュースもあまさず見ていたからだだった。

亮子が尾去沢小学校に入学したのが昭和二十四年。さきの謀略事件の起きた年である。

父兄会があるたびに、学校がわは、子どもたちが映画を見すぎる、と注意していた。トップにあげられるのが、いつも、亮子のなまえだった。

それでも亮子は、映画館に、するりと、もぐりこんでしまう。そのことで、父は、ねちねちと母に文句をいったが、母は、わらいとばしていた。

水俣病の発生を知ったのは、亮子が小学校五年のときだった。そのよく年、第五福竜丸が、ビキニ島でアメリカがおこなった水爆実験の、死の灰をあびる。

映画のスクリーンいっぱい、もくもくとあがった水爆実験のキノコ雲を、亮子は息をのんでみつめていた。

ソ連とアメリカが競争で水爆の実験をはじめたので、地球をとりまく上空は、放射能で汚染された、ニュースは、くり返していた。

そのときから、亮子は、空からふってくる雪や雨をのまなくなった。それまでは、雪でも雨でも、顔にうけて、べろべろ、なめるのが亮子のくせだった。

戦争映画を見ていたとき、館内に飛行機の爆音がとどろいた。亮子は「いま、頭の上に原子爆弾を落とされたらどうしよう」と、足が立たなくなったこともある。

昭和三十年、亮子は中学生になる。森永ドライミルク砒素事件があった。

昭和三十三年、県立花輪高校にうかる。高校まで、歩いて四十分かった。自転車では通えない、急な坂道だった。帰りは、その坂道を、冬でも汗をかいてのぼっていく。

このころから、亮子は、文学書や詩集に触れていく。ある日、クラスの男子生徒のひとりが、教師に質問した。

「日米安保条約は、あったほうがいいんですか。それとも、ないほうがいいんですか」

亮子は、からだを固くして教師をみつめた。ひからびたような顔の、中年のその教師は、

「さあ、そういうのは、それぞれの考えがあることだし……」
と、ことばをにごして、逃げた。

亮子は、教師全体に不信を抱くようになった。亮子は、ころころと、明るいわらい声をたてるわりには、口数がすくなかった。二、三の女子の友だちがいても、その子たちとさえ、ふかくつきあおうとはしなかった。授業中もほとんど発言しなかった。

昭和三十六年。高校を終えて上京する。杉山ドレスメーカー女学院に入学して、寮生活がはじまる。

とくべつ服飾デザインの仕事が好きだったわけではないが、女性も、生活の面でも自立しなければという考えがあつたのはたしかだ。

その学校でも、亮子は心からの友人をつくることができなかった。用心深いのか、人間ぎらいなのか、自分でもよくわからない。それでいて、さみしくてたまらなかった。

夕方から地図を片手に、ひとりで都内を歩きまわるようになった。日曜日は、日野や高尾のあたりまで足をのばした。

ドレスメーカーの師範科もいれて、三年間学ぶと、昭和三十九年、社員が十二、三人しかいない、駒形屋セーターという会社に入社した。組合活動はしませんという一札をいれさせられた。

会社は秋葉原にあった。亮子は、御徒町おかまちの裏通りに民間のアパートをみつめて、そこに移った。初めてのひとり暮らしだった。会社へいつている日中はいいが、電気のついていないアパート